

カンタータ第61番《さあ来てください、異邦人の救い主よ》BWV61

鈴木雅明指揮の同曲CD[BIS CD-881] 添付解説・礒山雅氏（〔 〕内は萩野注）、

歌詞対訳・萩野（参考：上記・礒山雅氏の訳）

クリスマス前の4番目〔4週前〕の日曜日に当たる待降節第1主日は、降誕節〔クリスマス〕を待つ希望と厳粛の季節を開始し、同時に、教会暦の1年を幕開けるものであった。それだけに、この日のためのカンタータ創作には、バッハは特別の感激を込めて取り組んだことであろう。現存する待降節第1主日用のカンタータはBWV61、62、36の3曲であるが、中でもBWV61は、記念碑的な作品と呼ぶことができる。なぜならバッハは、このカンタータをワイマール宮廷の楽師長に昇進してカンタータ創作の任を負ったその年に初演し（1714年12月2日）、トーマス・カントールとしてライプツィヒに赴任した最初の年にも演奏したからである。

「開始」の象徴は、カンタータの冒頭合唱曲に、大胆な実験の形で盛り込まれている。この曲はリュリの創始した「フランス風序曲」にドイツ古来のコラルを組み入れるという形で作曲されているのであるが、フランス風序曲はもともと、フランス宮廷において王がオペラ劇場の棧敷に入場するおりに演奏されるものであった。したがってそこには、教会暦の「幕開け」に加えて、信仰の王である救い主の来臨が暗示されていると見ることができる。ちなみに当日の福音書章句（マタイ21.2～9）は、イエスの「王」としてのエルサレム入城を語るものである。

組み入れられるコラルは、ルターの《いざ来ませ、異邦人の救い主》（1524）〔原曲："Veni redemptor gentium" アンブロジウス司教作、4世紀〕第1節である。このコラルは待降節のシンボルとも言うべきもので、バッハの同日用カンタータ3曲すべてに姿を見せている。教会暦に基づくオルガン・コラル集、《オルゲルビューヒライン》を開始するのも、このコラルである。

テキストは、オペラ風カンタータ歌詞の創始者とされるハンプルクの牧師、E.ノイマイスターの作から取られた。これは上記ルターのコラルを導入に、ニコライの有名な「輝く曙の明星のいと美わしきかな」（1599）を結びに使いながら、救い主の来臨を待ち望む心を歌う。編成は、弦と通奏低音のみの、いたって簡素なもの（初期の特徴として、ヴィオラは2部に分かれている）。しかし、青年期のバッハらしい作曲上の創意工夫がさまざまに行われ、変化に富んだ作品に仕上げられている。

<萩野解説> リリンク指揮のカンタータで萩野が最初に買ったLPの最初の曲がこの曲でした。上記解説を読むと、第1曲をフランス風序曲仕立てにしたのには、教会暦への入場、イエスのエルサレムへの入城の他に、バッハ自身の新任地への入場という意味が込められていたことが伺えます。一方、最後の第6曲が歌詞第7節途中から始まっていることに対しても様々な解釈がありますが、kommという単語をできるだけ最初に持って来て、歌詞において第1曲との対称性を確保したかったという解説が、一番納得できました。最初のアリア（第3曲）がkommから歌い出されるのも偶然ではないでしょう。>

第1曲 管弦楽組曲を思わせる器楽合奏で、カンタータは始まる。このイ短調の冒頭楽曲は、フランス風序曲の定型にならって3つの部分（2/2拍子、付点リズムによる緩部分と、3/4拍子の急部分）に分かれており、ルターのコラルは、4行のうち第1、第2、最終行が緩部分に、第3行が急部分に取り込まれている。すなわち、「全世界の驚き」のくだけりだけが、ポリフォニックな中間部で扱われるわけである。

**Nun komm, der Heiden Heiland,
der Jungfrauen Kind erkannt,
des sich wundert alle Welt,
Gott solch Geburt ihm bestellt.**

**いざ来たれ、異邦人の救い主、
乙女の子として知られ
全世界の驚きとなるお方よ、
神がこのような誕生を定められた。**

<萩野解説> フランス風序曲仕立ての合唱曲としては、他にはカンタータ第110番「われらの口に笑いは満ち」第1曲（こちら小川与半ライブラリに完備、第1曲は管弦楽組曲第4番序曲のパロ

ディ) が知られていますが、緩急两部分に合唱が埋め込まれている例は、萩野が知る限りではこの BWV61 の第 1 曲のみです。

Nun komm, der Heiden Heiland

4 声 が 1 声 づ つ 第 1 行 を 歌 い ま す 。 こ れ は 1 つ に は コ ラ ー ル 第 1 行 の 旋 律 が こ の 曲 中 に 最 多 数 回 現 わ れ る よ う に す る た め で す (BWV62 第 1 曲 も 同 様) 。 一 方 、 4 声 の 4 は 4 方 位 (東 西 南 北) ・ 4 元 素 (火 ・ 土 ・ 水 ・ 空 気) で 象 徴 さ れ る 地 上 = 人 間 界 を 示 し ま す 。 し た が っ て 、 こ の 部 分 は 人 間 の 切 な る 願 い を 各 々 が 訴 え る と い う 役 割 り を も 持 ち ま す の で 、 歌 い 方 は や や マ ル カ ー ト 気 味 で 、 特 に こ の 中 で 最 も 重 要 な 単 語 komm に 願 い や 希 望 を 込 め ま す 。 2/2 拍 子 の ア ク セ ン ト に 対 し て 、 言 葉 の ア ク セ ン ト は 逆 (Nun komm, der Hei-den Hei-land : 太 字 が ア ク セ ン ト 位 置) な の で 、 最 初 は Nun よ り komm の 方 に ア ク セ ン ト を 置 き ま す 。 Heiden Heiland の 部 分 は 旋 律 が 言 葉 の ア ク セ ン ト を 補 う 動 き を 見 せ ま す 。 上 3 声 の Heiland の 最 初 の 音 符 に ト リ ル が 付 い て い ま す (BWV62 第 1 曲 も 同 様) が 、 対 応 す る 通 奏 低 音 の 第 3 ・ 15 小 節 と バ ス の 第 23 小 節 の 第 2 拍 目 に も ト リ ル を 付 け たい で す 。

der Jungfrauen Kind erkannt

こ の 部 分 は 優 し さ を 感 じ さ せ る 和 声 付 け で す の で 、 歌 い 方 も 柔 ら か な レ ガ ー ト が 良 い で し ょ う 。

des sich wundert alle Welt

驚 き が 伝 わ る 様 子 が 多 旋 律 で 描 か れ て い ま す 。 alle と い う 単 語 が 長 音 や メ リ ス マ な の は 、 時 間 的 に も 音 域 的 に も 全 て (= alle) を 網 羅 し よ う と い う 意 図 の 現 れ で す (BWV62 第 1 曲 も 同 様) 。 拍 子 が 2/2 から 3/4 に 変 化 し た こ と で 音 楽 的 に 充 分 に 驚 き が 描 か れ て い る の と 、 3 拍 子 は (三 位 一 体 の 象 徴 で) 喜 び と 共 に 神 を 讃 え る 役 割 り を 持 つ の で 、 歌 い 方 は 第 2 ・ 3 拍 が 4 分 音 符 の 場 合 は 弾 ま せ て 、 軽 快 さ を 出 し ま す 。

Gott solch Geburt ihm bestellt

神 の 意 志 の 固 さ を 示 す よ う に 、 再 び マ ル カ ー ト 気 味 に 歌 い ま す 。 >

第 2 曲 続 く レ チ タ テ ィ ー ヴ ォ (テ ノ ー ル) は 、 ま ず 主 の 来 臨 を 既 成 事 実 と し て 扱 い 、 そ の 意 義 を 、 感 謝 を こ め て 考 察 す る 。 簡 素 な セ ッ コ 様 式 に 始 ま る レ チ タ テ ィ ー ヴ ォ は 次 第 に 旋 律 的 な ア リ オ ー ソ へ と 成 長 し 、 や が て 通 奏 低 音 と の 間 に カ ノ ン ふう の 進 行 を 見 せ て 、 望 み の 成 就 を 暗 示 す る 。

Der Heiland ist gekommen,

救い主がいらして、

hat unser armes Fleisch

私たちのいやしい肉と

und Blut an sich genommen

血を身に受けられ、

und nimmet uns zu Blutsverwandten an.

私たちを血を分けた同胞としてくださった。

O allerhöchstes Gut,

おお、この上なく尊い宝よ、

was hast du nicht an uns getan?

あなたが私たちにしてくださらないことが
あったらどうか？

Was tust du nicht

あなたはしてくださるではないか、

noch täglich an den Deinen?

いまでも日々あなたの者たちの益になることを。

Du kömst und läßt dein Licht

あなたは来て、その光を

mit vollem Segen scheinen.

いっぱい祝福で輝かされる。

<萩野解説 通奏低音の長さは、第 9 小節までは 4 分音符長以上の長さの音符を全て 4 分音符長で奏して良いでしょう。第 10 小節以後はアリオーソですので、イン・テンポとなります。 >

第 3 曲 - 9/8 拍子 こ こ で 、 八 長 調 の 大 ら か な ア リ ア が 流 れ 出 る 。 こ れ は 弦 、 通 奏 低 音 に テ ノ ー ル の 3 声 部 で 書 か れ 、 到 来 を 象 徴 す る 、 下 降 音 型 に 支 配 さ れ て い る 。 ヴ ァ イ オ リ ン 、 ヴ ァ イ オ ラ 各 2 部 が ユ ニ ゾ ン で 参 集 す る オ ブ リ ガ ー ト 声 部 は ひ と き わ 豊 麗 な 印 象 を 与 え る が 、 こ こ は お そ ら く 、 共 同 体 と し て の 「 教 会 」 の 象 徴 が あ る の だ ろ う 。

Komm, Jesu, komm zu deiner Kirche

来てください、イエスよ、あなたの教会に、

und gib ein selig neues Jahr!

そして幸いな新年をお与えください！

Befördre deines Namens Ehre,

御名の栄光を増し、

erhalte die gesunde Lehre
und segne Kanzel und Altar!

健全な教えを育て、
説教台と祭壇を祝福してください！

<萩野解説 上記解説の「到来を象徴する下降音型」は、第6曲コラール定旋律の最終行（他には「クリスマス・オラトリオ」前半に3回登場するコラール"Vom Himmel hoch..."定旋律最終行）にも関連があり、更にはBWV62の最初のアリアの主題前半とも関連しています。リンク指揮の演奏のLP解説では、中間部で「説教台Kanzel」が「祭壇Altar」よりも音程的に高いのは、実際のそれらの高さの違いが意識されている、とありました。

オルガン譜修正案： 必ずしもこのようにする必要はないと思いますが、K.リヒター版で聞こえるオルガンが魅力的だったので、参考までにご紹介しておきます。

第1小節：Bärenreiter original K.リヒター版

対応する第17、35、76小節も同様です。>

第4曲 - レクタティーヴォ 見よ、いつのまにかイエスが戸口に立って、扉を叩いている。ノックを模倣する不協和音（弦のピチカート）が耳を驚かせ、バスが、ヨハネ黙示録の聖句を引用する。

Siehe, ich stehe vor der Tür
und klopfe an.

見よ、私は戸口に立って、
叩いている。

So jemand meine Stimme hören wird
und die Tür auftun,
zu dem werde ich eingehen
und das Abendmahl mit ihm halten
und er mit mir.

誰か私の声を聞いて
戸を開ける者があれば、
私はその者のところに入り、
晚餐を彼とともにしよう。
彼もまた、晚餐を私とともにする。

<萩野解説 Va-IをVnで代用する場合、最終小節第2拍のF#は出ないので、そこではVa-Iは短三度上のAを鳴らし、F#はVa-IIで鳴らします。バス独唱は静かに歌う例が多いようです。>

第5曲 - ト長調、3/4拍子 主の叩く扉とは、信徒の心の扉にほかならない。続くソプラノのアリアは、来臨にこたえて「心を開け」と勤める。視点が個人に転換されるのに応じてオブリガート楽器は姿を消し、通奏低音のみがひそやかに伴奏する。「塵や土くれにすぎなくとも」以下の中間部はアタージョ、4/4拍子となり、恍惚とした趣を加える。

Öffne dich, mein ganzes Herze,
Jesus kömmt und ziehet ein.
Bin ich gleich nur Staub und Erde,
will er mich doch nicht verschmäh'n,
seine Lust an mir zu sehn,
daß ich seine Wohnung werde.
O wie selig werd' ich sein!

開け、私の心よ、すみずみまで。
イエスがいらしてお入りくださるのです。
私が塵や土くれにすぎなくとも、
イエスは私をさげすまれずに
心から顧みてくださいます、
私がイエスのすみかになるようにと。
ああ、なんと幸せなことでしょう！

<萩野解説 中間部は結構多くの単語が詰め込まれているので、しっかり発音できるところまでテンポを落とさざるをえないでしょう。

オルガン譜修正案： これもどちらを取るかは好みの問題で、個人的にはチェロと同時に始まる方が好みです。

第1小節：Bärenreiter original



修正案



第6曲 - ト長調、4/4拍子 最後にニコライのコラールの後半が歌われ、降誕/来臨への期待を爆発させる。活発な対位法を用い、華やかに装飾されたコラール編曲である。走り続けるヴァイオリンは、最後に、三点ト音にまでのぼりつめる。

Amen, amen.

Komm, du schöne Freudenkrone,

bleib nicht lange.

Deiner wart' ich mit Verlangen.

アーメン、アーメン。

来てください、美しい喜びの冠よ、

もうお待たせなさいませ!

あなたを私は、思いこがれて待ちます。

<萩野解説 一般的な4声コラールの歌い方ではなく、器乐的に扱うべきでしょう。最後は第13小節の終わりまでにかなりリタルタンドしておき、第14小節のテノールの32分音符が落ち着いて歌えるようにします。>